コミュニティソーシャルワークの方法に関する一考察

－知的障害者の地域生活支援の実践をとおして－

A Discussion on the method of community social work -Through some supportive practices in their community-life of ones with intellectual disabilities-

髙橋　爾（大阪市立大学大学院創造都市研究科）

Chikashi TAKAHASHI(Graduate School for Creative Cities, Osaka City university)

本論は、障害者が地域で包摂され生活していくための活動を、まさにコミュニティソーシャルワークとして実践していると思われる事例を紹介して、コミュニティソーシャルワークの理念と実践方法について検討するものである。最初に、コミュニティソーシャルワークの概念の歴史的・実践的背景に言及しつつ、障害者の地域生活支援の現状とコミュニティソーシャルワークの関係の問題点を析出した。そして、知的障害者の地域生活支援を行っている「わっはの家」（神戸市東灘区）の活動を調査対象にし、筆者が所属する「特定非営利活動法人あとからゆっくり」の活動経験を踏まえながらコミュニティソーシャルワークの視点で「わっはの家」の活動を評価した。筆者は、「わっはの家」の活動の事例研究から、これまでの障害者個別支援の方法論とは異にして、個人の発達に必要なセルフエンハンスメント（自己発揚感）をもたらす取り組みと、それらを伴った形での地域社会との交流という課題の社会化に繋がる機能を見出した。コミュニティソーシャルワークとして有効な活動の方法は、現在行われているさまざまな支援活動の中から、主体的活動を動機づける被援助者の発揚感の育成をもたらすプログラムおよび他者との関係づくりの細やかな現状分析から生まれるものであることを示唆した。そして、このような活動を創出あるいは支援していくことが、コミュニティソーシャルワークという言葉で含意されようとしていることの本質だと論じた。事例の考察を経て、コミュニティソーシャルワークの実証研究に有効な評価観点をいくつか提示した。①地域における障害者と地域住民との交流機能をもつ場や空間が設置されていること、②上記のような場や空間において、障害者と地域住民の「つながり」を創出しえるような共体験をもたらす「仕掛け」が見出されること、③障害者のエンハンスメントやエンカレッジが関係の中で生じていること、などである。

キーワード：知的障害者，地域生活支援，コミュニティソーシャルワーク

Keywords： Intellectual disabilities, Community-life support, Community social work

1. はじめに

日本の障害者福祉は、1998 年以降の社会福祉基礎構造改革によって大きく変化している。支援費制度のもとでは、利用者主体や自己決定の理念を具現化し、障害者が地域で自立した生活を営んでいくための支援が必要になっている。したがって「“必要と求め”に応じてサービスを提供するためのケアマネジメントが求められ、サービスを必要とする人が地域の住民とどのような社会関係をもち地域でどのようなソーシャルサポートネットワークを構築したらよいか」（大橋[2005][1)] p.12 ）といった総合的支援の重要性が言われてきている。

つまり、障害者の在宅福祉サービスがいまだ個別の直接的ケア提供に終始しているという認識の下で、ケアマネジメントを単なるサービスマネジメントではなく、地域で生活していくための総合的支援の一手法として捉えなお

すことが提起されているのである。具体的には、障害者の生活圏や人間関係などの環境面を重視した相談活動や、地域を基盤とするサービスの発見・つなぎ、あるいはフォーマル・インフォーマルサービスの提供・開発・関係調整などの機能を果たすコミュニティソーシャルワークが注目されてきている。

他方、コミュニティソーシャルワークの概念定義、そしてその機能の共通理解は必ずしもできておらず、コミュニティソーシャルワークの効果的な実践的方法については、未だ手探りの状態である。

本論では、筆者が所属する「特定非営利活動法人あとからゆっくり（以下、「あとからゆっくり」）や「チャレンジ東灘」における障害者地域生活支援事業を事例として、そこで行われている活動をコミュニティソーシャルワークの視点から整理し、障害者の生活支援におけるコミュニティソーシャルワークの役割や機能、それを進める実践的技法や可能性について考察する。

2. 研究計画

1）問題意識

筆者は、「あとからゆっくり」の専従スタッフとして、大阪府大東市・四條畷市を活動拠点にして障害者の地域生活支援事業に携わっている。その事業展開の中で、障害者の生活を支える制度や資源がどれほど整ったとしても、それだけで、障害者の安心した生活基盤を創り出すことはできない、ことを感じてきている。

本法人は、行政による制度のみでは不十分であるという認識のもと、制度の改変やインフォーマルな地域資源の開発をねらいとして、「必要な施策等は自らが資源となり事業として展開していく（法人設立趣意書，2001）」方向性を模索し2001年に立ち上げられ、種々の事業を展開している[注1)]。5年弱の活動の中で、当該地域に乏しい資源を充足させるため、障害児と家族のためのサポート事業や自動車移送サービスなどの提供を行ってきているが、その事業提供の中で、障害者が排除され、孤立している状況を目の当たりにしてきた。例えば、知的障害児と一緒に地域の児童センターに遊びにいくと「こいつしゃべられへんのか」と揶揄され小突かれたり、言語機能障害のある脳性マヒの障害者が街を出歩いていると、その喋り口調を真似され、石を投げられながら嘲笑されたりするといったことがある。また、知的障害者が喫茶店への入店を断られたり、知的障害児とその家族が地域の催し物で無視されたりするなど、「社会への参加」が拒否される事態も頻発している。地域住民を対象にして、いかに障害者の生活への理解を深めていくかが、筆者の大きな問題関心となったのである。

コミュニティソーシャルワークという概念への関心と期待は、そのような経験を背景に生じた。コミュニティソーシャルワークは、住民を取り巻く問題やニーズが多様・複雑化している中で、これまでの社会福祉制度や機能では解決しえなかった諸課題に対して、一人ひとりが地域での自立した生活を送っていくためのより多角・多面的な社会福祉実践の在り方として注目されている（福田[2003][2)] p．122）。しかし、そのコミュニティソーシャルワークを進める技法については、諸実践の結果を待つしかなく、その概念を具現する実践方法が様々な分野において蓄積されなければならない。

2）目的と意義

本論では、障害者やその家族が地域で孤立または排除されず、安心した生活を創り出していくために有効と思われた事例を報告し、コミュニティソーシャルワークという理念と実践方法について検討する。最後に、報告する事例の意義を検討することによってコミュニティソーシャルワークを評価するいくつかの観点を提示したい。こうした観点の形成によって、実証研究において有効な指標が準備されるのである。

3）方法

まず、コミュニティソーシャルワークの概念の歴史的・実践的背景に言及しつつ、障害者の地域生活支援の現状とコミュニティソーシャルワークの関係の問題点を析出する。そして、障害者が地域で包摂され生活していくための活動を、まさにコミュニティソーシャルワークとして実践していると思われる事例を紹介して、コミュニティソーシャルワークに必要な要素を析出する。

4）調査対象

調査対象は、筆者と共通した問題関心にたって活動を展開している「チャレンジ東灘」（神戸市灘区）の「わっはの家」の活動である。「わっはの家」は障害者（とりわけ知的障害者）の地域生活支援を目的に設立され、その活動の成果において一定の評価を得ている団体である。「わっはの家」では、親（支援者）のパターナリズムを排

し、障害者が主体となって活動を運営していくことと併行して、親とともに地域との交流やつながりを形成していくことが目指されている。そして、障害者の個別ケアの提供だけではなく、通常の発達と同様に、他者との関係を構築していくプロセスに注目して支援が展開されている。そのような支援における視点や価値観、および実際の活動は、わが国のコミュニティソーシャルワークにおいても先駆的意義をもつものである。考察においては、「あとからゆっくり」の活動経験を踏まえて「わっはの家」の活動を評価する。

なお、「チャンレンジ東灘」のフィールド調査は、2005 年 12 月 19 日に実施した。フィールド調査においては、施設の見学及び運営に参画している知的障害者の親 4 名の聞き取りを実施した。本論に登場する方の名前は、「チャレンジ東灘」の代表者以外は仮名である。

3. コミュニティソーシャルワークの概念について

1）コミュニティソーシャルワークの歴史的・実践的背景

コミュニティソーシャルワークは、「イギリスで 1982 年に公刊されたバークレイ報告において提案されたコミュニティに焦点をあてた新たなソーシャルワーク業務の進め方」であり、バークレイ報告で提案されたコミュニティソーシャルワークの概念については、「支援を必要とする人々の生活圏や人間関係などの環境面を重視した援助を行う。地域を基盤とするインフォーマルな支援を発見し、クライエントをそれらに結びつけたり、それらを支持したり、開発したり、制度的な資源との調整をしたりすることを目指す。クライエント自身がもつ強さや市民同士の支えあいの価値を再評価したり、問題の発生を予防する視点をもつなどの積極面が指摘されている。」と記述されている（吉原[2005][3) p. 105)。

日本においては、上記のようなイギリスでの論議を踏まえながら、コミュニティソーシャルワークが注目されるようになってきたのは 1990 年代以降である。現在、とりわけわが国でコミュニティソーシャルワークが語られる背景について、大きく 3 点を指摘しておきたい。

一つは、社会福祉基礎構造改革による流れである。1998 年から進められている社会福祉基礎構造改革による措置から契約制度への移行が契機となり、「施設から地域へ」という理念が広く一般化した。地域での自立生活を支えるために利用者主体や自己決定を原則にしながら、要支援者の個別支援についてケアマネジメントの手法を取り入れつつ、ケアサービスに関わるニーズ充足に限定されずに、地域をフィールドにして総合的に支援を展開するためのソーシャルワーク方法を開発する、という文脈である。

次に、上記と連関するかたちで、これまでのケースワークやコミュニティワーク、コミュニティ・オーガニゼーションといった地域福祉推進方法では、現在提起されている地域生活支援の理念を実現し得ないという実践的要請があることである。この文脈では「これまでの個別支援が、要介護者と介護者等の家族関係や社会関係、当事者の自己実現なども含めた一連のケアマネジメントを行うものとはなっておらず」（宮城孝[2005][4) p. 157)、フォーマルケアサービスの利用調整機能しか果たしえていない現状が問題になる。つまり「これまでのコミュニティワークは、個別課題を抱えている人には必ずしも直接的にかかわりをもたず、その抽象的・外延的援助のための地域住民の組織化や、大多数の地域住民の共通関心事の解決には取り組んできたが、地域で個別生活課題を抱えながら、地域自立生活を望んでいた人々への個別支援とそれを支えるソーシャルサポートネットワークづくりとを個別具体的に展開する実践は弱かった」（大橋謙策[2001][5) p. 26～27）のである。

三つ目は、これまでの措置制度による申請主義に基づく制度適用型のソーシャルワークで、アウトリーチの必要性が指摘されるのであるが、そのアウトリーチサービスはコミュニティワークとしては機能していないということである。本来、インテンシィブなアウトリーチを必要とする高齢者の介護問題をはじめ、児童虐待や障害者の孤立化などに対して現状のアウトリーチで実施される機能は極めて限られている。そのような現状から、要支援者（とりわけマイノリティ）のニーズ・生活課題を発見し、そのニーズ充足と生活課題を社会で共有化する活動も重要だとする認識が生まれている。

2）障害者支援からみたコミュニティソーシャルワーク概念の再考

筆者は、コミュニティソーシャルワークの必要性が語られる背景を以上のように理解しているが、実際のコミュニティソーシャルワークについては諸家による定義がある。包括的な定義としては、以下のような大橋（2005）の定義が妥当だろう。

『コミュニティソーシャルワークとは、地域に顕在的に、あるいは潜在的に存在する生活上のニーズを把握（キャッチ）し、それら生活上の課題を抱えている人や家族との間にラポート（信頼関係）を築き、契約に基づき対面式（フェイス・ツー・フェイス）によるカウンセリング的対応も行いつつ、その人や家族の悩み、苦しみ、人生の見通し、希望等の個人的因子とそれらの人々が抱える生活環境、社会環境のどこに問題があるかという環境因子に関して分析、評価（アセスメント）し、それらの問題解決に関する方針と解決に必要な支援方策（ケアプラン）を本人の求めと専門職の必要性の判断とを踏まえて、両者の合意で策定し、その上で制度化されたフォーマルケアを創意工夫して活用する等必要なサービスを総合的に提供するケアマネジメントを手段として援助する個別援助過程を重視しつつ、その支援方策遂行に必要なインフォーマルケア・ソーシャルサポートネットワークの開発とコーディネイト、ならびに“ともに生きる”精神的環境醸成、福祉コミュニティづくり、生活環境の改善等を同時並行的に推進していく活動及び機能といえる』（大橋謙策[2005][6] p. 17）

ところで、このようなコミュニティソーシャルワークの概念規定を視座の中心にすえて、筆者の問題関心や障害者の生活支援状況を捉え返すと、どのような実践課題がみえてくるだろうか。

① これまでの障害者に対する個別支援課題がある。障害者支援（ケアマネジメント）においては、制度に生活を当てはめるやり方が大半と見受けられ、本人のニーズを中心にした資源開発やインフォーマル資源の発見・コーディネイトといった部分は、その必要性が訴えられることはあっても、実践している例は筆者の周りには少ない。「現行の障害者ケアマネジメントは、既存の介護資源とニーズをマッチングさせる機能以上は見出しにくい」（小川・武田・橋本[2003][7] p. 23）のである。

② 従来のコミュニティ・ワークについては、高齢者の支援活動が組織されることはあっても、障害者の生活支援にその活動範囲が及ぶことがほぼ見受けられない現状がある。少なくとも筆者の実践現場においては、「高齢者の見守り活動で精一杯」「障害者とは、どのように接していったらいいかわからない」という校区福祉委員会のメンバーのことばが示すように、既存のコミュニティワークの守備範囲に障害者は包摂されておらず、大橋の言うソーシャルサポートネットワークは、一部の限られた個人・団体によってのみならず、極めて限定された対象者のために形成されているのが現状である。

③ 上記のような実践課題と求められるコミュニティソーシャルワークの機能に加え、「“ともに生きる”精神的醸成、福祉コミュニティづくり、生活環境の改善」を謳う活動または機能が必要である。ソーシャルサポートネットワークづくりとの連続性の中で、“ともに生きる”精神的醸成や障害者を取り巻く排外的な生活環境の改善をどのように進め、安心して生活できる基盤を創出できるかという点にこそコミュニティソーシャルワークの核心があるはずだが、有効な実践例の不足するところである。

次に、次章以下、まさにコミュニティソーシャルワークと思われる活動を具体的実践事例に即して分析、考察する。

4. 事例研究

1)「チャレンジ東灘」（「わっはの家」）の活動概要

「チャレンジ東灘」は、知的障害児をもつ親が中心となり、2003 年神戸市東灘区で発足した障害者の自立と社会参加を進める地域活動グループである。「この子を残して私が先に行くと思うと不安で・・。今、私が元気なうちにがんばって何かしておかないと」という一人の親のことばから、育成会[注2)] 東灘支部に関わる親が中心となって 4 年前に「親亡き後の勉強会」を開催したことが活動の始まりである。その勉強会が発端となり、『将来親を離れて暮らす生活基盤づくり（例えばグループホームなど）や、家族共々のびのびと楽しく暮らせるような地域の耕しや、仲間作りを進めていこう』（代表：高島順子）と、2003 年 4 月に『チャレンジ東灘』及び活動の拠点となる「わっはの家」の運営をはじめた。その活動内容は、宿泊体験やレクレーション活動などを通じた生活・余暇活動支援、知的障害者とその家族の相談活動、地域交流活動などである。

2)「わっはの家」活動の背景

この活動を展開するようになった背景について、代表の高島順子は次のように語っている。『活動の願いはひとつ。子どもたちが生きる力をつけ、仲間とともに地域の中で理解され、受け入れられ、一般の市民として暮らしてほしいということ。親による庇護で生かされるのではなく、本人の力を引き出し仲間をつくりながら生活をしてい

く展望を持てるような場にしたかった。』このようなことばは、当事者サイドからのコミュニティソーシャルワークの要請を見事に言い表している。そして、具体的な活動としては現在、知的障害者のピアグループである「フレンド」を生じ、知的障害者同志が話し合ってイベントを企画したり、料理教室を開いて地域の人たちに料理を振舞うなどの自主的・関係形成的活動が行われている。それはコミュニティソーシャルワークであり個別の自立支援を包摂するものである。

このような活動が、高島自らの活動体験を通して思いつかれていることに注目したい。高島は、『活動を進める中で大切にしている一つに地域交流がある。勉強会をしている時に、地域の自治会や老人会などにその活動のお話をしにいったが、私たち知的障害者と家族がどんな暮らしをし、何を願っているのか、地域の人たちには、まったく知らされていなかったということに気づかされました。』と、活動の中でどのようにコミュニケーション、関係の大切さを思い至ったのかを語ったのである。「わっはの家」のメンバーも、『地域の催しに出かけていくには勇気がいった。一緒に行こうと誘ってくれる人もいなかった。』と語っていたが、住民との付き合いの機会がほとんどなかったことを受けて、昨年から月に一度、地域の清掃活動を始めた。最初は、怪訝そうな様子で眺めていた地域住民は、回を重ねていく毎に、「きれいにしてくれてありがとうと声をかけてくれるようになった。」という。そして、今では地域の人たちも清掃活動に参加してくれるようになっているだけでなく、月１回行う習字教室においても、障害者と地域住民がともに経験（活動）する機会と場になってきたとのことだった。

4)「わっはの家」の活動内容と見出される効果・機能

「わっはの家」活動は、コミュニティソーシャルワークを意図して始まった活動ではないが、コミュニティソーシャルワークの概念規定や機能に見られるような、“ともに生きる”精神的醸成や障害者を取り巻く生活環境の改善をどう進めるかという点に重要な示唆を与えてくれている。以下に、「わっはの家」活動が果たす効果や機能を析出していく。

（１）　親同士のつながりづくり

「わっはの家」活動にみられる中心的機能は、母親や障害者のセルフヘルプグループ化とそこに付随するエンパワメント機能であるとまとめることができる。

「育成会の活動で顔は知っていても、『腹を割って話するような関係にはなかった』」（高島）状態から、高齢の親の一言がきっかけで参集したグループは、孤立しがちな母親同士の支えあいや共感を生み出し、生活課題やサービスについての情報交換、学習活動、孤立感の軽減、地域住民への働きかけなどの機能を創出している。会員の一人である古田は、子ども同士や親同士の関係が希薄な中で孤立感を感じているときに「わっはの家」の活動と出会い、その後の変化を『ここに参加するようになり、まず親の居場所ができた、抱え込まなくていいと感じました。それから、子どもは、一緒にいろいろな経験をする仲間ができ、活動範囲も広がっていきました。』と述べた。こうした機能については、聞き取りした母親四人全員が語っており、このつながりの感覚（我々感覚）が、「地域に出るには勇気がいった」という状況から、次の行動（コミュニティ・アクション）へと転化する力の源泉となったことが推察される。

それを通して振り返ってみれば、こうした活動の機能や効果は「あとからゆっくり」の活動でも見出すことができていたのである（髙橋・新崎　2004 [8]）具体的には、障害児とその母親、および学生ボランティアとの協働で実施したボランティア体験スクール（2004年実施）があげられる。当日の講座やその準備段階においては、母親が日常生活の中で感じている疎外感や、障害の受容に関わる葛藤などを共有化する場となり、参加者それぞれが、相互の関わりの中で自己を勇気付けていった様相が見られた。そして、本講座の実践を契機に、以後の活動における法人と母親による協働実践や、受講生のボランティア活動への継続的参加が生み出されていったのである。

（２）　障害者同士のつながりづくりと主体的活動

この「わっはの家」の活動がユニークなのは、『これまで母親が「これがいいだろう、あれがいいだろう」と親の都合を押し付けてきたり、本人のことを置き去りにしてきたのではないか』（高島）という気づきをもって、自らを「本人（障害者）を支援するボランティア」として位置づけ、本人活動（「フレンド」）の立ち上げやその活動支援にまわっていることである。「フレンド」のメンバーは、宿泊体験や料理体験、外出活動、様々なイベントの企画・運営に主体的に関わる仲間作りのプロセスや実際の参画により、楽しさや嬉しさを感じながら、自信を得た

のである（『わっはの家通信』：第3号[2005]）。

このような活動は、実際の生活上において、具体的なスキルアップや情報収集、知識の獲得など、役立つ何かを習得することに直結するものではない。ここでみられる機能は、他者との関係の中で得られる効果であり、快適な情動興奮とともに、自身の存在感覚を肯定的に体験するセルフエンハンスメント（自己発揚感）＜あるいは、エクスパンシィブネス＝自己拡張感（丸田[1999][9] p. 99）＞を経て、自己を勇気付ける（エンカレッジ）機能である。極めて興味深いことに、「フレンド」のメンバーは『いつから活動を始めたのか？』という問いに、『(はっきりと)2年前からです』と答えたということがあった。チャレンジ東灘の活動は、実は4年目に入っていたものの、知的障害者にとっては、ピアグループが立ち上がった2年前こそが「スタート」として位置づけられていたのである。高島はそのことを「本当にこれまで、親が庇護して、本人の力を奪ってきたんだ、引き出せなかったんだと思い知らされた」と語っていた。

こうした障害者を主体とする活動の意義を考えると、「あとからゆっくり」の活動もあらためて捉え直されてくるようである。1986年から運営されている「障害者と健全者の解放の家（以下、「解放の家」）」では、本人主体の理念を実現させる一つの試みとして識字活動が行われている。脳性麻痺と知的障害のある若松さんは、就学期に入学を断られ（就学免除）、「学校に行きたかった」という。だから、週1回は識字教室として7年前から「勉強」している。識字教室では読み・書き・算に加えて、「とりあえず、いろいろやってみる」をテーマに調理実習や、外出体験、生い立ちの掘り起こしなど、様々な経験をする場となってきた。料理を作った際は、横を向きながら包丁を扱い介護者をヒヤヒヤさせた。しかし、ぐっとこらえて本人に任せてみる。家に閉じこもり（閉じ込められ）「あぶないから、できないから」といって体験できなかったことが若松さんの社会性を乏しくさせていたり、人間関係を狭めているのではないか。そのような思いから、具体的なスキルの獲得を通じた失敗経験とそれを乗り越える経験は、これまで若松さんが取り除かれてきた通常あるべき学びのプロセスとして大切にしてきた。また、「できなかったことができた」時に生じる快適な情動興奮と肯定的な感覚体験は、自発的に学ぶ意欲や感情の解放、他者との関係づくりへと繋がっているようだ。例えばコーヒーの入れ方を失敗しながら取得した若松さんは、イベント時に、「どうぞ。私がいれました！」と参加者にコーヒーを振舞ったりするようになった。若松さんは、出会った当初はうつむき加減でほとんど言葉を発しなかったのであるが、コーヒーを振舞うその一言や表情からは、出会った当時の若松さんの面影は消え、それとは逆に、とても得意気な様子と自信が伺える。

こうした識字活動は、自身の生活に根ざした自律的学習の実践とその過程として捉えられよう。つまり、知的障害があるゆえに無知・無力な存在とされ、そこから生じる過剰な保護的関係や生活環境によって様々な社会経験や人間関係の形成から遠ざけられてきた若松さんが、自分に誇りをもち主体的に自己表現するように動機付けられる場、本来あるべき体験をそのまますする場としての機能が注目されるのである。そのような自発的動機づけが高まっていた若松さんは、識字活動にも積極的に取り組むようになり、識字活動という学習、そして関係形成能力をも身につけていったのである。そのベースにあったものとして、筆者は特に自己感覚を復活するセルフエンハンスメントに注目している。

（3） 地域との交流

「わっはの家」では、「地域での生活を展望していくには、地域の人たちの理解が不可欠」と考え、「フレンド」のメンバーとともに積極的に地域での催しに参加していくようになった。地域清掃活動や料理教室への招待、習字教室の地域への開放を行い、現在少しずつではあるが、地域住民との交流が生まれ始めている。母親同士が集い、その思いを共有できる場や本人が主体的に活動できる場が、地域住民に対して無関心でもなく、介護（ケア）という行為を介した役割固定的な資源の供給・需要関係でもなく、地域の隣人として新たな「つながり」を創出しえる場として機能することが期待される。

そこでの「つながり」は、福祉コミュニティづくりにおける「課題の社会化[注3)]」の機能までは必ずしも伴ってはいないが、むしろ、当事者住民としての「問題」把握以前の（顔見知りになったら存在が気になりだした、という質の）「つながり」ということができ、実はそうした「つながり」がソーシャルサポートネットワークづくりを促進するのではないかとも考えられる。

こうした活動は、前述の「解放の家」活動においても発見できる。「解放の家」では農園作業が日常活動の一つとして位置づけられているが、ともに農園作業に勤しむ地域住民とは、いつの頃からか、親しげに挨拶を交わす関

係が形成されていった。「トマトはあんまり水やったら甘くならんで」。そんな作物や畑作業にまつわる「うんちく」を滔々と説く地域住民もいれば、「今度うちで忘年会するからおいで」と声をかけてくれる人もいる。現在では、福祉農園を中心にした集まりの中では、障害者の存在は当たり前とされ、定期的なバーベキュー会や収穫祭などが催されている。地域の一部の人との交流であれ、そのような他者との関係が実現する場なのである。そのような交流及び、その経験が個人や社会にどのような影響をもたらすのかという壮大な社会実験が、コミュニティソーシャルワークという名で呼ばれようとしているのだと考えればよいのではないだろうか。

5. 考察

1)「わっはの家」活動にみるコミュニティソーシャルワークの機能とその技法

「わっはの家」活動は、これまでの障害者個別支援の方法論とは異にして、個人の発達に必要なセルフエンハンスメントをもたらす取り組みであると言うことができ、それらを伴った形での地域社会との交流という課題の社会化に繋がる機能をもつものである。

こうした機能をコミュニティソーシャルワークの機能、とりわけ、筆者が注目している「“ともに生きる”精神的環境醸成、福祉コミュニティづくり、生活環境の改善等」を推進していく機能に照らして再定義するとすれば、どのようなことがいえるだろうか。

「わっはの家」は、孤立感を感じていた障害者の母親が自ら立ち上がって集う場を形成したことに始まる。そして、障害者の力を抑制していたのは、他ならぬ最も身近な親ではなかったかという反省をするに至った。そのような認識によって、障害者は自身の仲間作りをしながら様々な体験を積み、「こうありたい」「こんなことをやってみたい」と願う希望や願望を表出するようになった。実際、自身が抱く希望と現実の生活には、隔たりがあることのほうが多い。その「あいだ」に自らをおき、隔たりや壁に直面して修正していく過程こそが、発達や自律的学習のプロセスであるとすれば、今後「こうありたい」と願う「生活」「暮らし」を自ら経験し、実際の生活上の困難や失敗に当たっていくことは、発達のプロセスの重要な一過程と捉えられる。ややもすれば、親主導の活動は、親であるが故の「パターナリズム」が生じやすい。日常的につい手を出すという傾向があることは無理からぬことであろうが、保護的な活動は発達のプロセスの意義を損ねているというのも一面である。他方、「わっはの家」の活動やそこで表出している障害者の発言や行動は、被保護的関係から脱却し、ケアされる客体から生きる主体へと変容する過程と意義付けることができそうである。

そして母親、障害者それぞれが、当事者活動によってエンパワーされた力を地域交流と生活基盤の創出へと転化させていこうという志向性と活動の実際は、まさしくコミュニティソーシャルワークの活動として位置づけられるのではないだろうか。当事者の組織化は、それそのものが地域資源（居場所、共感できる人とのつながりづくりの場、一人で抱え込まなくていいという気持ちが醸成される場、仲間とともに様々な体験をする場、自信をもつ）開発ということができる。また、自ら創り出した資源に身をおきながら、地域に働きかけを行い障害者の生活理解の促進や新たな生活基盤開発（インフォーマルサービスの創出・支援）へと「チャレンジ」する様相は、自分が暮らす身近な地域でのソーシャルサポートネットワークづくりの過程と捉えることが可能であろう。

このような活動を創出あるいは支援していくことがコミュニティソーシャルワークの一つの役割であろうし、地域住民にはたらきかけ、その交流の「しかけ」づくりを果敢に試みることが、筆者がもっとも注目しているコミュニティソーシャルワークの機能でもある。その「しかけ」は、まだまだ弱く、地域住民に効果的なインパクトを充分与え得ているとは言いがたいかもしれない。しかしながら、その中にあって、障害者が「ケアされる存在」に閉じ込められず、仲間づくりや主体的な他者との関わりの中で、自らの力を引き出し、「直接的な関わりあいをもたらす地道な協働作業の場面・空間」（わっはの家では清掃活動や習字教室がそれにあたる。解放の家であれば、それは農園作業と捉えられるかもしれない）を創出することによって、それが新たな「つながり」づくりへと展開する可能性は指摘できると思われる。

個々のケアを中心とするケース支援に完結するのではなく、まだ出会えぬ当事者同士をつないでいったり、地域住民と当事者をつなぎながら、「この前一緒にごみ拾いをしたあの障害者」が、目に留まれば気に掛かる、声をかけるといった「問題」把握以前の「つながり」を生み出す場面・空間の創出あるいは過程の延長線上に、ソーシャルサポートネットワークの一形成過程を見出したい。その上で、“ともに生きる”精神的醸成や福祉コミュニティ

づくり、生活環境改善の推進としてのコミュニティソーシャルワークが展望できるのではないかと考える。

2）今後の課題と提案

本調査は、これまでの障害者の地域生活支援が、個別の介護（ケア）サービスマネジメントに終始している現状と課題の中で、障害者を取り巻く排外的生活環境をいかに変えうるかという問題意識から出発した。その状況を変革していくための方法としてのコミュニティソーシャルワークは障害者の地域生活支援においてどのように貢献しうるか、コミュニティソーシャルワークに求められる中心的機能は何かという問いから「わっはの家」や本法人の活動事例をみた。

こうした事例の考察から、コミュニティソーシャルワークの実証研究に有効な評価観点をいくつか提示したい。まず、地域における障害者と地域住民との交流機能をもつ場や空間を設置するといった「仕掛け」づくりが評価観点の一つになりうるのではないだろうか。そのような場は、「問題」把握以前の「つながり」をつくりだし、実はそのような「つながり」がソーシャルサポートネットワークづくりの基盤になると考えられるからである。小林も、このような場における地域住民との交流機能を、障害者と支援者とが共同で運営する喫茶コーナーにも見出している（小林[2005][10] p.26～28）し、野宿生活者支援における喫茶店の運営[注4)]からも同様の機能が伺えるのではないだろうか。障害者支援に限定されず、他分野の活動からも「わっはの家」や「解放の家」に見られる「拠点」「足場」の設置・運営は、地域での「つながり」をもたらす「仕掛け」としてコミュニティソーシャルワークの観点から見直される。次に、上記のような場や空間において、「問題」把握以前のつながりを創出しえるような共体験をもたらす「仕掛け」が見出されるかどうかが評価観点として挙げられる。ただ一緒に居るということもさることながら、同じものを見たり、同じことをともにするという体験は、障害者や地域住民双方に新しい体験の共有を生じさせやすい。それが相互に認め合う関係形成に向けた体験の一つの型であることに注目されなければならない。考えてみれば、このような共体験の意義が、広く多様な人たちとの交流においても重視されている現状は、ひとえに障害者支援の領域に限定されたものではない。さらに、障害者のエンハンスメントやエンカレッジが関係の中で立ち現れているかどうかも注目される。とりわけ障害者の支援においては、親や支援者のパターナリズムが生じやすい。「わっはの家」の活動でみたように、自己の操作活動や現実対処活動が、自発性・能動性に基づいて行われたあとに、他者への積極的なはたらきかけが能動的に継続して起こっていることを見過ごしてはならない。

以上のように、知的障害者の地域生活支援の実践をとおしてコミュニティソーシャルワークを評価する際の観点をいくつか提示した。今後、事例研究を通して析出された活動の意義及び効果について、客観的数量評価の作業も必要である。本論で明確にした観点から、評価対象の選定や調査範囲の作成などが課題である。

【補注】

1）　特定非営利活動法人あとからゆっくりでは、2005 年 12 月現在、介護者派遣事業、身体障害者グループホーム運営事業、作業所運営事業、レスパイトサービスセンター運営事業（障害児の一時預かりや外出支援）、コミュニティソーシャルワーク機能配置促進事業（大阪府委託事業）、自動車移送サービス、政策提言などを行っている。

2）　1956 年、障害児学級の親や教員によって「兵庫県手をつなぐ親の会」が結成された。以来、県下の市や県福祉事務所単位に３２地区の育成会が組織され約５，５００名の会員を擁するようになった。「知的障害があっても人としての尊厳を持ち、よりよい人生を送ってほしい」という親の願いを実現させることが育成会の主旨とされ、福祉施策の改善や地域で当たり前に生活できる社会作りが目指されている。　財団法人兵庫県手をつなぐ育成会「育成会の歩み」（http://www9.ocn.ne.jp/~tunaguik/ 2005. 12. 31）

3）　もともと、地域福祉の脆弱さから施設入所に至った入所者が抱える問題を、地域の問題として地域に再提起しながら、地域での問題解決能力を高め、施設入所を最大限に防ぐ取り組みを行うことをいう。（藤井博志, 2004,『地域福祉と施設サービス』上野谷加代子・松端克文・山縣文治編「よくわかる地域福祉」ミネルヴァ書房　107 頁）　ここでは、筆者は、障害者が抱える生活課題を地域住民と共有し、住民を巻き込みながらその課題解決や予防を行う諸実践として捉えている。

4）　「社会福祉法人みおつくし福祉会」が運営する大淀寮（更生施設）では、主に大阪市の「愛りん地区」などで、病気やその他の事情で働くことができなくなった単身の男子労働者に、生活（衣食住）や医療面 でのサポート

を行っている。その事業運営の中で、毎週木曜日、13：00～16：00 まで、裏庭を開放して「喫茶ボランティア」を実施しており、寮の利用者のみならず、地域住民にも親しまれている。大淀寮「喫茶ボランティア・サービス」（http://www.wannet.com/oyodo-ryou/kissa/kissa.htm　2006.1.21）

【参考文献】

1）大橋謙策[2005]「コミュニティソーシャルワークの視点と機能」（大橋謙策他編『コミュニティソーシャルワークと自己実現サービス』）万葉舎

2）福田公教[2003]「地域福祉に関わる方法　コミュニティソーシャルワーク」（上野谷加代子・松崎克文・山縣文治編『よくわかる地域福祉』）ミネルヴァ書房

3）吉原雅昭[2005]「コミュニティソーシャルワーク」（山懸文治・柏女霊峰編,『社会福祉用語辞典』）ミネルヴァ書房

4）宮城孝[2005]「わが国におけるコミュニティソーシャルワーク応用上の視点と課題」（大橋謙策他編『コミュニティソーシャルワークと自己実現サービス』）万葉舎

5）大橋謙策[2001]「コミュニティワークからコミュニティソーシャルワークへの発展」（福祉士養成講座編集委員会編『新版　社会福祉士養成講座７　地域福祉論』）中央法規出版

6）大橋謙策[2005]「わが国におけるソーシャルワークの理論化を求めて」（『ソーシャルワーク研究』，相川書房）

7）小川喜道・橋本義郎・武田康晴[2004]『障害者（児）の地域生活支援のあり方に関する研究報告書』

8）髙橋爾・新崎国広[2004]「地域市民のエンパワメントと連帯の可能性～大阪府大東市におけるボランティア体験スクールの実践事例～」（『大阪教育大学発達人間福祉学論叢』）

9）丸田俊彦・丸田郁子訳[1999]『間主観的な治療の進め方』岩崎学術出版

10）小林繁[2005]「ノーマライゼーションの視点から見た障害をもつ人が働く喫茶コーナーの可能性」（『日本福祉教育・ボランティア学習学会第 11 回こうべ大会発表要旨・論文集』）